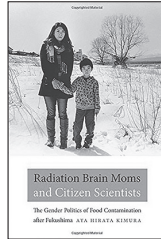


書評と紹介

Aya Hirata Kimura

*Radiation Brain Moms and
Citizen Scientists :
The Gender Politics of
Food Contamination
after Fukushima*



評者：平林 祐子

本書は、ハワイ大学で女性学 Women's studies を教える日本人女性研究者が、福島第一原発事故後に日本で行ったフィールドワークをもとに執筆した本である。

描かれているのは、事故後、子どもたちの放射線被ばく、とくに食品を通した内部被ばくについて憂慮し苦悩し、対応策を探し求めた日本の母親たちである。母親たちが抱いた懸念は当初、非科学的で過剰なものとして非難され、「放射脳」radiation brain という造語で揶揄された。しかし彼女たちは諦めることなく、子どもたちに可能な限り安全な食べ物を与えるために学習と調査を続け、仲間たちのネットワークをつくり、学校給食に関する要望を成功させ、市民放射能測定を継続的に行い情報を発信するようになっていった。つまり、頭がおかしい「放射脳」だと笑われる存在から、市民科学者 citizen scientists へと変貌をとげたのである。

著者の Kimura は、ジェンダー研究を専門とし、女性と結び付けられる「食」、その安全性をめぐる科学、およびジェンダーのポリティクスについて研究を行ってきた（著書に *Hidden*

Hunger : Gender and the Politics of Smarter Foods, 2013)。福島原発事故後の母親たちの苦悩と活動は、まさに食、科学、ジェンダーがクロスするところに起きたできごとであり、著者の問題関心が具体化したようなトピックと言ってよい。そこで本書で著者は、食品汚染のリスクに直面した日本社会における、食の統制 policing と、それに対する市民（母親たち）の運動を、社会を支配する科学主義、ネオリベリズム、ポスト・フェミニズムに照らして描き出すことを試みている。

本書の組み立ては、最初にイントロダクション、最後に結論の章が置かれ、間の5つの章で具体的事例が描かれるという形になっている。

イントロダクションでは、本書の分析視角、すなわち、科学/科学者、食のあり方、社会運動において、日本では女性がどんな立場に置かれているのか、どんな能力や役割を期待されているのかが述べられている。女性の立場や役割に大きく影響しているのは、日本社会の支配的な考え方である、科学主義、ネオリベリズム、ポスト・フェミニズム（男女平等は既に達成されているという考え方）である。「女性は積極的に主張をすべきではない」「女性は非科学的である」などの伝統的ジェンダーバイアスや、効率的で生産能力が高いことを重視しそれ以外のことにエネルギーを使うべきでないといった価値観は、女性の行動に大きな影響を与えており、自律的な個人の考えを持つことに対して大きなハードルとなっている。いっぽう、先進的な社会と呼ばれるためには「女性の活躍」も実現しなければならないため、支配的価値観に合った女性の行動が喧伝されることも指

摘されている。食品汚染を否定する「リスク・コミュニケーション」を積極的に行う女性たちが賞賛されるのである。本書の主人公は、政府の言う「安全」に疑念を持って市民科学的な行動をとるようになった母親たちだが、それとは逆に政府の公式見解を広めることに腐心する女性たちの存在も著者は的確にとらえている。

1章から5章は大きく2つのパートにわかれており、1章と2章では福島第一原発事故後の食べ物をめぐる policing, 3章から5章では女性たちによるそれへの挑戦が描き出される。

原発事故後、子どもたちの食べ物を心配するようになった母親たちにいったい何が起きたのだろうか。著者は、神奈川県に住む30代の母親のケースなどを通して、福島周辺の食品を避けるようになったことに対する激しい社会的非難を描き出す。福島の農産物を避けることは風評被害の原因であり、生産者を文字通り被害者にしてしまう非合理的で非科学的な行動だという見方が広がり、そういう行動をとっているのは主に女性だとされた。消費者の当然の権利であるはずの食品選択が、福島からの避難者に対するいじめと同じ恥ずべき差別的行動としてくられ、「放射脳」という単語に象徴される酷い非難、侮蔑がまき起こったのである。このような一連のロジックないし決めつけの背景にあるのは、家庭のなかの性別役割分業（食べ物を用意するのは女の仕事）、「女性は科学に弱い（だから非科学的な考えによって愚かな行動をとる）」といった伝統的ジェンダーバイアスなどである。つまり、ここで起きたことは、社会にもともとある女性差別と深く結び付いた policing (p.35) であると著者は示している。

子どもに安全な食品を与えようと努力していたにすぎない母親たちは傷つき、自責の念にかられたり悩んだりすることになる。そして政府が放射線被ばくの影響を否定した（より正確に

言えば、被ばくの影響については分からない部分があることを否定した）ことをきっかけに、「客観的」「中立的」な存在と思っていた科学や科学者が、実は政治的な存在であることに気づいていく。

いっぽうで、政府や原子力推進勢力（原子力村）は、「科学的」であること、生産性が高いことに価値を置き（科学主義、ネオリベラリズム）、彼らに同調する一部女性を利用することを考える。放射能汚染の否定と原子力推進に向けたリスク・コミュニケーションの前面に女性を出し（たとえば2章で紹介されているWomen in Nuclear - Japan）、疑いを持っている女性たちは科学について無知なので教育する必要があると主張する。

では、母親たちの挑戦とはどのようなものだったのか。本書で調査対象となっているのは、学校給食をめぐる運動（3章）、市民放射能測定団体（4章、5章）、である。

放射能のリスクの定義をめぐる嵐のような戦いが続くなか、不安を持つ母親たちは学校給食に福島県産食品を使わないことを求める運動に取り組む。風評被害をもたらすとして激しい非難にさらされ、母親たちは次の3つ——データなどの科学的客観性、母性、「女子力」——を強調することで対抗し、一定の成果をあげるが、著者はここで、設置された討議の場には母親たちは招かれなかったことも指摘している(p.103)。

次に本書の主たる調査対象となっている市民放射能測定団体が登場する。震災後に全国各地に誕生したこれらの団体は、2014年2月段階で74団体を数え、著者らはそのうち65団体のメンバーに対して聞き取りを行っている(p.109)。最初は個人で食品の測定を行っていた人が知人から頼まれて測定を行い、徐々にネットワークが広がっていくといったプロセス、そして本人たちが意図しないうちにそれが

対抗運動の性格を持つようになる軌跡を著者は丁寧に跡付けている。Kimuraは、市民グループの測定活動は動員／社会運動の一形態であり、明示的な抗議形態よりも測定活動が選ばれた背景には、政治における科学の重視と、ネオリベラルな社会の価値観（模範的とされる市民像）があるという（p.131）。

市民測定団体はその後、資源や活動可能なスタッフなどの活動資源の不足、測定される汚染物の低下などにより、徐々に活動量が減り、なかには閉鎖するところも出ているという。運動としての持続性は必ずしもないかもしれない。しかし著者は、汚染物質の測定という活動は、科学と生産性に価値を置く現代社会を生き延びるための市民の手段であり、市民科学 citizen science は、科学主義に支配された政治に一般市民が参加する道をひらく可能性を指摘している（p.154）。

本書で展開された、科学主義、ネオリベリズム、ポスト・フェミニズムの3つのイデオロギーがいかに日本社会をコントロールしているかについての分析は説得力のあるものである。伝統的ステレオタイプの女性像（食を含む家事全般の担い手、非科学的・感情的、自分の考えを主張すべきではない存在）と、先進的で合理的・効率的な社会での「活躍」が期待されるいま現在の女性像（合理的科学的思考により、「間違った」懸念を否定し、「正しい」リスク・コミュニケーションを行う存在）の双方が、突如出現したリスクへの個々人の対応とそれへの社会の反応に決定的影響を与えていることが丁寧に描き出されている。伝統的女性像は公式見解を疑いながらも行動できない女性、現代型女性像は進んで公式見解を追認する女性を生み出すわけだが、どちらも、受け身の存在であることに変わりはない。やっていることは正反対で

も、どちらも、男性（およびそれとセットの科学と効率）が支配する社会で承認されるためにそれぞれの行動をとっていることに変わりはないからだ。

学校給食をめぐる運動や市民測定活動を続ける女性たちについての記述は、実際に行った聞き取り等がもとになっており、この種の活動についての詳しい調査は他にほとんどなされていない点からも、たいへん貴重である。参加者の行動パターン等の説明として著者が挙げる「ネオリベリズム（とそれによる制約）」から具体的な運動参加や継続等までの間には、運動固有の要因やメカニズムが介在すると考えられるので、もう少し掘り下げてほしい気はするが、運動としての市民科学の重要性や選ばれた必然性等についての分析は示唆に富んでいる。

以上見てきたように本書は、福島原発事故以降に起きた原発に関わる運動研究の一つとして、重要な著作である。一読を勧めたい（日本語で出版されることを望みたい）。

最後に、本書の内容そのものからは離れるが、日本人研究者が実際に日本で行った独自の調査にもとづく研究を英語で発表したことの意義を確認しておきたい。社会学の分野ではいまに至っても、日本人研究者による英語での発表は、日本語で書かれる膨大な量の研究に比して極めて限定的である。とくに東日本大震災のような世界的事件／事例について、優れた研究がたくさん行われているにもかかわらず国外ではほとんど知られていない、という状況はあまりにも悲しい。本書の著者 Kimura のように国際的に通用する言語や機会を持っている日本人研究者は、日本の言語や背景知識を持つ点では外国出身の日本研究者に比べ圧倒的に有利であり、より深い理解にもとづく優れた研究が期待できる。（著者は前書まで、日本でフィールド

ワークを行う際、「日本人なのに海外に行ってしまった人（震災後にはとくに「海外に逃げた人」に近いニュアンス）」として否定的に見られることへの不安や困難があったことを述べている。それを乗り越え、家族らと長期間離れるつらさも乗り越えて調査を敢行し、見事に本書をまとめた努力に拍手を送りたい。）

Kimuraのように海外の大学で学び、職に就いている日本人研究者には、先鞭をつける役割を期待したい。今後は国内の大学で学び就職する大多数の日本人研究者も基本的には理科系と

同じように研究発表は国際的に流通する形で行うことが、世界の研究の前進のためにぜひとも望まれる。同時にそれは、日本で「文系」の研究が生き残っていくためには否応の無い必然だろうと思う。

(Aya Hirata Kimura, *Radiation Brain Moms and Citizen Scientists: The Gender Politics of Food Contamination after Fukushima*, Duke University Press, 2016, xiv + 210pages)

(ひらばやし・ゆうこ 元都留文科大学文学部教授)



法律文化社
Hotta Bunsha Sha

京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71 ●表示は本体価格(税抜)
http://www.hou-bun.com/

「子どもの貧困」を問いなおす
●家族・ジェンダーの視点から
●松本伊智朗 編 貧困の本質は「構造的な不平等」。家族という仕組みを相対化し、そこに女性が負ってきた社会的不利がどのように埋め込まれてきたかという点に立ち返って、貧困を問いなおす。
序 なぜいま、家族・ジェンダーの視点から子どもの貧困を問いなおすのか
松本伊智朗

●A5判・272頁・3,300円

第I部 子どもの貧困と政策

1 子どもの貧困対策の行方と家族主義の克服……………湯澤直美
2 新自由主義への抵抗軸としての反貧困とフェミニズム……………藤原千沙
3 「女性の貧困と子どもの貧困」再考……………阿部彩
4 イギリスにおける近年の子どもの貧困対策から学べること——対策にみる成果と課題……………フラン・ベネット訳・屋代通子・松本伊智朗

第II部 生活の今日的特徴と貧困の把握

5 新自由主義下における日本型生活構造と家族依存の変容……………蕨輪明子
6 貧困把握の単位としての世帯・個人とジェンダー……………丸山里美
7 子育て家族の家計——滞納・借金問題から考える……………鳥山まどか

第III部 ジェンダー化された貧困のかたち

8 ドメスティックバイオレンスと子ども……………吉中季子
9 貧困と若年女性のライフコース——その「選択」の現実……………大澤真平
10 若年女性の貧困と性的サービス労働……………杉田真衣
11 若年女性にみるジェンダー観とケア役割……………藤原里佐
12 障害者ケアから照射するケアラー女性の貧困……………田中智子
おわりに「貧困の再発見」を確かなものに……………

デモクラシーとセキュリティ 杉田敦 編
●3,900円

●グローバル化時代の政治を問い直す 第一線の学者が政治の危機を分析

序 グローバル化と政治の危機……………杉田敦

I グローバル化の中のデモクラシー

1 グローバル化時代の集団的自己決定……………押村高
2 資本主義と民主主義はなおも両立可能か……………田村哲樹
3 戦争と難民の世紀からテロリズムの世紀へ……………五野井郁夫
4 代表制、参加、民主主義の民主化……………千葉眞
5 リベラル・デモクラシーを下支える「公共精神」をどこに求めるか……………白川俊介

II グローバル化の中のセキュリティ

6 領土と主権に関する政治理論上の一考察……………前田幸男
7 ポスト・ヘゲモニー時代の国際秩序思想……………高橋良輔
8 例外状態における正統性をめぐる政治……………山崎望